

# ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性についての探究 — 幼稚園における支援内容と小中学校における支援内容との縦断的関連 (3) —

佐々木全・池田泰子\*, 千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・小野章江・吉田美奈子・川村真紀・  
本宮和奈・下山恵・伊藤りつ子\*\*, 菊池明子\*\*\*

\*岩手大学大学院教育学研究科, \*\*岩手大学教育学部附属幼稚園,

\*\*\*岩手大学教育学部附属特別支援学校

(平成31年3月4日受理)

## 1. はじめに

### (1) ユニバーサルデザイン授業を巡る動向

本学部では附属4校園との協働によって、ユニバーサルデザイン授業の普及・推進に取り組んだ<sup>1) 2)</sup>。これは、通常学級における特別支援教育の普及・推進と重ね合わせた平成22～27(2010～2015)年度の事業であり、岩手県内の公立小中高等学校の協力を得て「ユニバーサルデザイン授業実践事例集」と「ユニバーサルデザイン授業実践事例集・増補版」を公刊するに至った<sup>3) 4)</sup>。

そもそも、ユニバーサルデザイン授業とは、ユニバーサルデザイン授業とは、どの子どもも、わかる・できる授業をめざすものであり<sup>5) 6) 7)</sup>、教師の努力目標を端的に表現したスローガンでもある。これには、当然ながら通常学級に在籍する特別な支援を有する児童生徒を、包摂する理念がある。また、ユニバーサルデザインの概念自体が、多様な支援内容を包摂する「傘概念」である<sup>8)</sup>。このイメージを図1に示した。

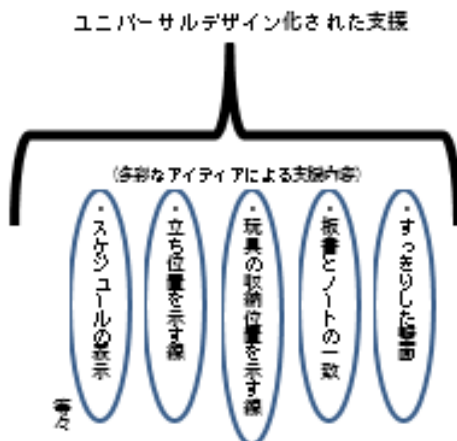


図1 ユニバーサルデザイン授業の傘概念

また、ユニバーサルデザイン授業は、その着想において二つの起源があるといえる。一つは、通常学級における授業において伝統的に目指され、磨かれている授業改善の取組である。もう一つは、近年重視されている、通常学級における特別支援教育の実現としての授業改善の取組である。

さて、近年のユニバーサルデザイン授業を巡る動向を見れば、全国的には、一般社団法人日本授業UD学会が2016年に設立され、以来、毎年全国大会を開催していることが象徴的である。また、この学会は、2019年現在で20を超える支部・部会を擁している<sup>9)</sup>。さらに、全日本特別支援教育研究連携が編集する「特別支援教育研究」(東洋館出版社)では、毎号「実践 授業ユニバーサルデザイン」のページが設けられ、実践報告が掲載されている。これらのことは、ユニバーサルデザイン授業の全国的な普及・推進に大きく貢献しているといえよう。

岩手県内では、2015年に「岩手ユニバーサルデザイン授業研究会」が設立され、ユニバーサルデザイン授業の普及・推進を進める上での旗印となった<sup>10)</sup>。その後、「第48回全国情緒障害教育研究協議会岩手大会」において「ユニバーサルデザインの授業はどうあればよいか」と題された分科会が企画され、県内の実践報告を交えて協議がなされた<sup>11)</sup>。また、岩手県立総合教育センターによる岩手県教育研究発表会においても、ユニバーサルデザインをキーワードにしたり、「全ての生徒がわかる」などその趣旨を汲んだりした授業実践研究が見られるようになった<sup>12)13)</sup>。

さらには、盛岡市教育委員会学校教育課では、

2018年に「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり 特別な誰かにではなく、誰にでもわかりやすい授業とするために」と題した小冊子を独自に作成し市内小中学校に配布し、授業改善ならびに通常の学級において特別な支援を要する児童生徒への対応を喚起している。

以上のように、ユニバーサルデザイン授業に関する実践と研究は、今や全国各地で普及・推進されている状況である。

## （２）本研究の経緯

「保育の基本はユニバーサルデザイン」といわれている<sup>14)</sup>。そもそも幼児教育では、教師は「幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」<sup>15)</sup>。つまり、環境を通して行う教育、環境へのアプローチこそが幼児教育における方法の基本である。また、対象とする幼児は、発育発達上の個人差が顕著であり、発達障害等の症状との峻別がしにくい発達期にあるため、より広汎な状態像の幼児を想定する必要がある。つまり、全ての幼児を包括することが幼児教育の基本である。そのため、どの子どもも、わかる・できる授業に相当する、ユニバーサルな保育が目指されることは幼児教育の前提であり必然である。

幼稚園における「わかる・できる」とは、幼児期に育みたい資質能力として挙げられる「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活とのかかわり」「思考力の芽生え」「自然とのかかわり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）<sup>16)</sup>への接近であり、これらは、小学校の学びへの接続という観点からも注目される。もちろん中学校への接続も必然である。

接続における具体的な内容の一つとして、幼稚園における支援内容に関する情報が小・中学校においても共有・活用されることが想定される。例えば、ユニバーサルデザイン化された支援内容や方法に関する情報提供があれば、幼児に対する小学校での

適応の一助となるだろう。このことは、ライフステージごとの支援内容の連続性・継続性を重視する「切れ目のない支援」<sup>17)</sup>とも換言できるだろう。

## （３）本研究の目的と着眼点

本研究では、幼稚園において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容が、小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容との間にどのような関連があり、どのような系統性が想定されるかについて、その仮説を提起することを目的した。このイメージを図2に示した。

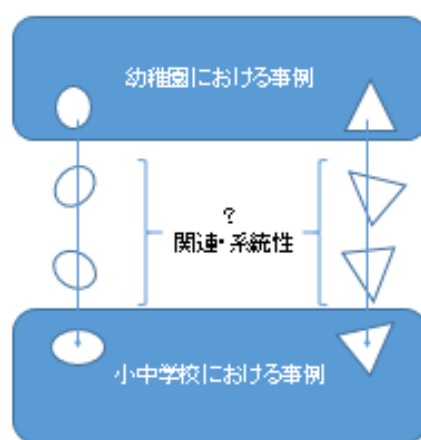


図2 関連と系統性のイメージ

なお、この端緒として実施した1年次研究では、授業参観によって収集した実践事例をもとに、附属幼稚園と附属小中学校における実践内容について、3つの系統性があることを仮説として見出した<sup>18)</sup>。すなわち、①教育内容に即した系統性である。幼稚園においては、生活内容が扱われ、小中学校では教科内容が扱われる。各々の内容における系統性であるのではないか。

②実施主体に即した系統性である。ユニバーサルデザイン化された支援内容の実施主体は教師であるが、内容によっては、子ども自身がそれらを内在化し自らあるいは互助的に活用することがある。つまり、実施主体の交代や移行における系統性であるのではないか。

③認知発達段階に即した系統性である。ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性は、認知発達段階に即した整理ができるのではないか。ユニバ

ーサルデザイン化された支援内容においては、視覚情報を活用するなどの認知的な側面に着目した実践例が少なからずある。そこには、視覚情報への感受性、理解度など、認知発達段階に即した系統性があるのではないか。

以上を踏まえつつ、2年次にあたる前年度研究では「③認知発達段階に即した系統性」に着眼し、そのレパートリーとなる事例として、特に視覚情報と対比的に語られることの多い聴覚情報の活用事例を収集した。また、3年次にあたる本年度研究では、引き続きユニバーサルデザイン化された支援内容における実施状況の様相に着目し、そこにある系統性を探索する。

## 2. 方法

附属幼稚園と附属小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容の事例について次の資料等から把握する。すなわち、①ユニバーサルデザイン授業実践事例集、②授業参観記録、③当該授業の学習指導案、④当該授業の動画記録、⑤当該授業者に対する聴取記録、⑥教師による研究保育における協議である。

その上で、本稿では附属幼稚園における実践事例を取り上げ、これを基調として、附属小学校と附属中学校の実践事例と比較対照し、実践内容における系統性について考察する。支援事例は、エピソードとして記述する。保育研究会等の幼稚園教員による取組においては、子どものエピソードについて提供し合い教師間で多角的な解釈をもって、環境構成や援助方法が検討されることが多い。本稿においては、エピソード記述及びその活用の方途の主張<sup>19)</sup>を踏まえつつ、幼児教育の現場における方法を採用した。

なお、エピソードの記述においては匿名性を担保するような表記とした。

## 3. 結果

### (1) 附属幼稚園における砂場遊び

ここでは、基調となる実践として附属幼稚園における砂場遊びを挙げる。

第一に、6月末の砂場での遊びにおける4歳児の砂遊びである。公開保育研究会における指導案<sup>20)</sup>によれば、幼児の遊びの様子とそれに基づく教師の援助について、次のように記されていた。

「桶に水をどんどん流していくことを楽しんで」「桶を長くつなげてみたものつなぎ目から水が漏れてしまうことを発見し、つないでいるところを押さえたり、つなぎ方を変えたりして工夫していた」「もっと長く桶をつなげたいとコンテナを使いながら構成していた」「砂場にどんどん水が浸透してしまうことに気が付き、水の通り道を掘っていくなどの幼児の姿があった。

担任は「興味を持った遊びにかかわりながら、一人ひとりがものと向き合いながら、考えたり、試したりして、工夫して遊ぼうとしたり、面白そうなことが起きると、一緒に遊ぶ楽しさを感じる姿が見られるようになってきている」と見ていた。

援助のポイントとして「砂場の工事や川づくりでは、それぞれ試したり考えたりしながら充分にかかわれるようにする。友達の遊びの面白さに気付いていけるよう、子どもたちの発する言葉や動きを受け止めたりつなげたり一緒に動いたりし、思う存分楽しめるような状況を作っていく」ことが挙げられた。

その上で具体的な援助の内容として、次の3点が挙げられた。①「桶をつなげて水を流したい」、コンクリートのように砂を桶につめたい」など、一人ひとりの遊びのイメージが違っていることもあるので、子どもたちの発する言葉や動きを受けとめていく。②子どもたちが楽しもうとしていることに教師も一緒に楽しみながら、同じような動きをしたり一人ひとりの思いを言葉にして返してつなぎ役になったりしていく。③桶、桶スタンド、発砲ブロック、ペットボトルなどを用意しておく、である。

第二に、10月下旬の砂遊びにおける5歳児の砂遊びである。園内の研究保育の指導案(展開案)<sup>21)</sup>によれば、幼児の様子とそれに基づく「予想される幼児の姿」、「環境の構成と指導のポイント」について、次のように記されていた。

「遊び始めは試しにいろいろな動きが出てきたが、トンネルを掘ってみたいという思いが5人の共

通になったところで前日の遊びが終わった」「A児が声をかけることなどがきっかけで、ほることが始まるだろう」「B児を中心に、こう掘ったらいいのではないかという話をしながらトンネルを形にしていこう」「どうしてもうまくいかないときは、何かのきっかけで違うものに目的が変わることもあるだろう」「C児が仲間と一緒に遊ぶことの楽しさを感じたり、C児の発想の面白さを周りが受けとめたりしてほしいので、会話や状況を感じ取りながら、互いの存在をつないでいけるように、居方や声のかけ方を考えながらかかわる」「水の量の調整やどれくらい深く掘ったらいいかなどについて、子どもたちだけで話が進まない時は、前に絵本で見た砂のトンネルなどを思い起こすように声をかけたり、教師も考えをつぶやいたりして、一緒に考えていく」である。

以上では、いずれの砂遊びにおいても、幼児の活動として試行錯誤の取組が想定されており、そのプロセスにおける援助が構想されていた。

また、指導案には記述されないものの、実際の保育中には、教師の随時の判断によって講じられた援助があり、このいくつかを保育参観によって把握した。例えば、用具及びその収納場所である。砂場で使用する用具は、砂場の傍に配置されており、スコップ、シャベル、コンテナ、桶やバケツなどが豊富にあり、また、幼児が自らの意思で持ちだしたり収納したりすることがしやすい高さで配置であった。また、用具は幼児の遊び方や遊びのイメージに即して合目的、多目的に使用しやすいものであった。

砂場の傍らに配置された用具とその収納場所（幼児の一人が道具を選定している）。



図2 砂遊びの様子

5歳児の遊びにおいては、スコップを持ちだしたD児とシャベルを持ちだしたE児がおり、二人で大きな穴を掘り進めていた。会話を楽しみながら、しゃがんで掘り進める際に、D児にとってスコップは使いにくいようであったために、スコップを仕舞い、シャベルに持ち替えて遊びを継続する様子があった。このような試行錯誤もあり、それを可能にする用具及びその収納であった。これらに関する様子を図2に示した。

## （2）附属小学校における体育

6学年の体育科において「単元名 力いっぱい遠くへ」として実施された「陸上運動 投の運動」の授業<sup>22)</sup>である。校庭での実施であった。

本授業では、投の運動について「運動の行い方がわかり、自分の目標に向かって挑戦したり、仲間の目標のために支え合ったりしながら、力強く投げることができる」ことが目指された。

そのための指導上の工夫として、練習の機会を保障し、『できる』と『わかる』を往還させながら知識及び技能の習得を促進するという方針の下で、投の運動によって「物体に与え得る運動が、可視化できるような工夫」や「個人種目でありながら集団的達成感が味わえるような工夫」がなされた。前者の内容として「テニスボール投げ(初速度の可視化)」「バトン投げ(投射角度可視化)」「シャトル投げ(ムチ動作の可視化)」などの運動が準備された。後者の内容として、チームの合計記録が100Mを超えることを目標としたことであり、これによってチーム

メイトが相互に見合ったりアドバイスをしあったりするなどのかわりを促進するという授業者の意図があった。

児童は、チーム内でお互いの試行を見合い、また、投げられた「ジャベボール」(ロケット上の投擲物)が発する音を手がかりに、既習事項であった投の運動の要領を対照しながら、かつ試行錯誤を重ねた。

### (3) 附属中学校における技術・家庭科

2学年の技術・家庭科(技術分野)において「題材名 エネルギーを変換して利用しよう」として実施された「エネルギー変換の技術」の授業<sup>23)</sup>である。技術室での実施であった。

本授業では、電気自動車の力学的な機構を構想して設計の具体化と製作過程の評価、改善及び修正について考えることが目指された。

そのための指導上の工夫として、電気自動車の「製品化」を仮想し、それによって、電気自動車の模型の製作において、安全、快適、利便、環境などの機能への着眼を促進するという方針の下で、使用する模型の選定がなされた。これは、歯車などの機械要素がパーツ化され、組み立て、分解が容易にできる。それに加えて、乾電池、スイッチ、コネクタを使用することで簡単な電気回路を作成できる。これによって、電気エネルギーを動力へ変換する機構を実現することができる。端的には、エネルギーをパワーやスピードに変換させること、その配分を調節することによって、生徒は自らの構想を実現する機構を検討しコンセプトカーを製作した。また、学習の過程においては「協働や試行と思考を繰り返す場面を効果的に設定し、生徒の主体性を引き出しながら構想設計に対する意欲を高めるように働きかけたい」との授業者の意図があった。

生徒はグループ内で自らの設計と、試作したコンセプトカーを発表し合い、そこでの修正・改良の方策について相互に意見交換する場面を経て製作活動に移った。製作活動では、コンセプトカーの試運転によって、修正・改良の結果を自ら検証し、また、生徒同士相互に試行を見てアドバイスし合うなどしながら、試行錯誤を重ねた。ここでは、コンセプトカーの性能を確認しうるように、勾配や凹凸など

の条件を含んだテストコースが各テーブルに準備されていた。

## 4. 考察

3つの実践事例は、いずれも子どもの試行錯誤がテーマであり、活動としての試行錯誤の価値を認めそれを保障する支援がなされていた。

### (1) 試行錯誤自体に取り組みやすい支援

ユニバーサルデザイン化された支援内容として抽出するならば、試行錯誤自体を子ども自身が繰り返し実施できるような環境を構成していたことである。この環境の中には、ハード面としての場や用具の設定がある。

場の設定の具体を3つの実践事例の順に挙げるならば、遊びの題材であり場でもある砂場、存分に投の運動を繰り返せる広い校庭、作業場及び試運転のためのテストコースであった。

用具の具体を3つの実践事例の順に挙げるならば、スコップ等の用具と管理がしやすい収納、投の運動の要領を可視化するテニスボール等、電気自動車模型であった。

### (2) 試行錯誤の過程で協働が得られやすい支援

3つの実践事例においては、試行錯誤の過程における協働が重視され、子どもたちが協働しやすいような方針や手立てが示されていた。

その具体を3つの実践事例の順に挙げるならば、附属幼稚園では「友達の遊びの面白さに気付いていけるよう、子どもたちの発する言葉や動きを受け止めたりつなげたり一緒に動いたりし」「子どもたちが楽しもうとしていることに教師も一緒に楽しみながら、同じような動きをしたり一人ひとりの思いを言葉にして返してつなぎ役になったりしていく」などであった。

一方、附属小学校と附属中学校の2実践事例に共通して、学習内容及び課題が個人種目あるいは作業でありながら、そこでの試行錯誤を協働しやすいように、学習を共にするチームまたはグループ編成があり、目標の明示、相互に活動を見合いアドバイスし合えるような観点としての既習事項の活用があった。

### (3) ユニバーサルデザイン化された支援内容の 系統性の検討

本稿で取り上げた活動内容としての試行錯誤と協働については、いずれも、小学校及び中学校においては、学びの方策あるいは過程として重視される。

これらは、図4に示す「授業のユニバーサルデザインのモデル図」<sup>24)</sup>における「参加（活動する）」の実現であると共に、そこから「理解（わかる）」「習得（身に付ける）」「活用（使う）」への円滑な連結を実現するものであると理解できた。

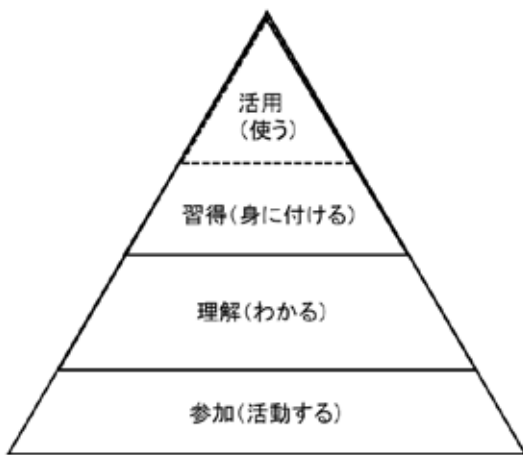


図4 授業のユニバーサルデザインのモデル図

一方で、幼児教育において、これらは、遊びの中で自然発生的に生じるものとして期待される。自然発生的に生じると言っても、教師の教育的意図によってそれらに取り組む幼児の姿が得られるように環境の構成がなされる。幼児教育においては、試行錯誤や協働は、学びのための方策というよりも学びの内容そのものと考えられ、重視される。これは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活とのかかわり」「思考力の芽生え」「自然とのかかわり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）の各内容を総合的に含んで営まれる子どもたちの豊かな遊びの実現である。

試行錯誤や協働の教育的な意義の解釈は、幼稚園と小学校及び中学校において、それぞれの教育の特

質上異なりを有するが、このことを背景として、系統性を見出すこともできよう。

まず、支援内容としての教師のかかわりに注目すれば、幼稚園での支援内容は、教師による随時の促進や幼児同士のやりとりの成立を支えようとするものであった。そもそも、試行錯誤や協働のゴールは一定の目標を目指すわけではないためである。

小学校及び中学校での支援内容は、随時よりもむしろ事前に既習事項に即した観点の投入があり、その後は児童あるいは生徒同士がこれを活用する。試行錯誤や協働のゴールが示され、目標の実現としての収束を目指すためである。

ここには、ゴールを探りながら進行する「遊び」と、ゴールとしての教科内容の習得を設定して進行する「学習」が対照され明確になる。これは、遊びから学びへと学校生活（くらし）の系統に即した支援内容の変遷で有り、系統ということができよう。仮説としてあげられた一つである「教育内容に即した系統性」に含まれる内容として理解できる。

### (4) 今後の課題

本研究において産出した仮説については、少数の事例から見出したものであり、今後質的、量的な側面からの検証が必要である。

なお、ユニバーサルデザイン授業の普及・推進を背景として多様な実践研究が進められているが、そもそもユニバーサルデザイン授業の効果の検証などは今後も課題で有り続けるだろう。それは、現状がユニバーサルデザイン授業の効果の検証方法自体の検討を含んでいるからである。そもそも、ユニバーサルデザイン授業の効果を検証しようとするとき、多要素によって構成される授業の総体を取り上げることは難しい。実際には、授業中の個別具体の手立ての検証がされがちである。

また、誰にとって効果をもたらしているのか、効果をもたらす機序はいかなるものかなどについて明らかにする必要がある。これは、障害のある子どもなどを対象とした事例研究があるが、一方で、ユニバーサルな効果、すなわち、他の全ての子どもに対する効果の説明も求められる。

ユニバーサルデザイン授業の追求は、日常の授業

の価値を再発見・再評価するという意義がある。このことから、ユニバーサルデザイン授業に関する実践及び研究の発展を願う。

### 謝辞

本研究は、新たな知見の発見や提供であるとともに、伝統的かつ日常的な教育における価値の再発見や評価を願うものでもありました。

3年次に渡った本研究にご理解ご協力をくださった皆様に記して感謝申し上げます。

### 文献

- 1) 佐々木全・滝吉美知香・我妻則明・名古屋恒彦・最上一郎・塚野弘明・下山恵・紀修・柏木廣喜・遠藤寿明・高橋文子・小川恵美子・高室敬・山本一美・山崎健・藤井雅文・菊池明子・佐々木弥生・熊谷佳展(2016)：附属4校園及び教育委員会との協働によるユニバーサルデザイン授業の普及啓発事業—その到達点と今後の方向性—。岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業 教育実践研究論文集, 3, 109-14.
- 2) 佐々木全 (2015)：大学から地域へ！ユニバーサルデザイン授業の発信。実践障害児教育, 43 (4), 22-3.
- 3) 岩手大学教育学部 (2014)：岩手大学教育学部附属学校ユニバーサルデザイン授業実践事例集。http://www.edu.iwate-u.ac.jp (2017.5. 15. 閲覧)。
- 4) 岩手大学教育学部 (2016)：岩手大学教育学部附属学校ユニバーサルデザイン授業実践事例集増補版。http://www.edu.iwate-u.ac.jp (2017.5. 15. 閲覧)。
- 5) 佐藤慎二(2014)：実践通常学級ユニバーサルデザインⅠ。東洋館出版。
- 6) 佐藤慎二(2015)：実践通常学級ユニバーサルデザインⅡ。東洋館出版。
- 7) 小貫悟・桂聖(2014)：授業のユニバーサルデザイン入門 どの子も楽しく「わかる・できる」授業の作り方。東洋館出版社。
- 8) 佐々木全・池田泰子・下山恵・千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・小野章江・北條早織・川村真紀(2017)：ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性についての探究—幼稚園における支援内容と小中学校における支援内容との縦断的関連(2)—。岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 10-7.
- 9) 日本授業UD学会(2018)：日本授業UD学会について。http://www.udjapan.org/ (2018.2. 9. 閲覧)。
- 10) 前掲文献1)
- 11) 岩手県情緒障がい教育研究会編(2016)：ユニバーサルデザインの授業はどうあればよいか。第48回全国情緒障害教育研究協議会岩手県報告書ひこばえ, 52-60.
- 12) 藤原洋樹(2016)：すべての生徒がわかる喜びを実感できる授業づくり—ユニバーサルデザインを取り入れた指導の工夫—。平成27年度(第59回)岩手県教育研究会発表資料, http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryou/h27/h27\_1602\_1.pdf (2018.2.11. 閲覧)。
- 13) 西川亮・岩渕晃児(2018)：わかる算数の授業をつくる～日常と算数をつなぎながら～。平成29年度(第61回)岩手県教育研究会発表資料, http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryou/h29/0306\_1.pdf (2018.2.11. 閲覧)。
- 14) 下山恵(2017)：保育の基本はユニバーサルデザイン。特別支援教育研究, 714, 13-15.
- 15) 文部科学省(2017)：幼稚園教育要領。http://www.mext.go.jp/a\_menu/shotou/news/youryou/you/you.pdf(2018.2.11. 閲覧)。
- 16) 文部科学省(2016)：次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告)。http://www.mext.go.jp (2017.5.15. 閲覧)。
- 17) 厚生労働省(2016)：今後の障害児支援のあり方について(報告書)。http://www.mhlw.go.jp (2017.5.15. 閲覧)。
- 18) 佐々木全・池田泰子・下山恵・千葉紅子・高

橋文子・渡邊奈穂子・石川幸子・北條早織・小川恵美子(2017)：ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性についての探究—幼稚園における支援内容と小中学校における支援内容との縦断的関連—。岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 50—55.

- 19) 鯨岡峻 (2005)：エピソード記述入門 実践と質的研究のために。東京大学出版社.
- 20) 渡邊奈穂子(2018)：4歳児つばき組指導案。平成30年度 公開保育研究会要項・指導案, 岩手大学教育学部附属幼稚園.
- 21) 高橋文子(2018)：5歳児たんぽぽ組 研究保育資料 展開案。岩手大学教育学部附属幼稚園.
- 22) 菅原純也(2018)：第6学年体育科指導案。平成30年度 岩手大学教育学部附属小学校 学校公開研究会 要項, 岩手大学教育学部附属小学校, 98-101.
- 23) 加藤佳昭(2018)：技術・家庭科(技術分野)学習指導案。平成30年度 学校公開教育研究発表会資料, 7-14.
- 24) 前掲文献7)。

資料1：ユニバーサルデザイン授業実践事例集(表紙)



資料2：ユニバーサルデザイン授業実践事例集増補版(表紙)



資料3：ユニバーサルデザイン授業実践事例集増補版掲載内容例

